

山下 洪文（やました こうぶん）



第一回江古田文学賞高校生部門には、詩・俳句・小説等、さまざまなジャンルの作品が計一九篇寄せられた。いずれも、文学を夢見る高校生の、はつらつとした感性が発露した作品であった。

一九篇と言うと少ないようだが、昔の雑誌でも、関係者が匿名で投書して、読者欄を水増ししたり、ひどいときは一人の編集者が複数の名前を用いて、誌面を充実する（ように見せかける）ことすらあった。その点、まずまずの出だしと言えるのではないか。

ほんとうは全作品に講評を書きたいところだが、紙数の関係で省く。ただ、多くの投稿者に当てはまるであろうことに

ついて、以下に列記する。

ボードレールは、女性の髪の毛にアフリカを、アジアを、そして「亡びたすべの国」の面影を見出している。またマラルメは、日焼けた「妹」の額から、枯葉を、それが舞い落ちてゆく泉を、空に向かう噴水の流れを思い浮かべている。

前者は「物（髪の毛）」から「心（旅への憧れ）」を、後者は「心（妹への愛）」から「物（庭園の情景）」を連想している。これを「万物照応」と言い、十九世紀を代表する詩法である。

小説の応募作は、高校生とは思えぬ発想の飛躍と連鎖、魅力的な物語じかけが随所に見られた。ただし、物を表現するときにただその物を、感情を表現するときにその感情を書いてしまうのは、いかにももったいない。

悲しみを表現するとき、「悲しかった」と言うべきではない。それは記号的な言葉にすぎない。人間の生身に迫る表現を工夫すべきだ。

また、「欲望」「後悔」「不思議」などと

いった言葉に、頼るべきではない。それは、既成の意味にそまりすぎているからだ。書かれるのは、作者自身の「欲望」「後悔」「不思議」でなければならない。誰かの言葉ではなく、自分だけの言葉で、自己のどん底にあるものを抉り出すべきだ。

詩・俳句の応募作は、印象的なシーンの切り取りに長けるものが多く、今後を期待させる。ただし、美しい、あるいは醜い一瞬だけを書く手法には、限界がある。「なぜ書くか」という問いがなければ、「書く」ことはできても、「書きつづける」ことはできない。この技術を生かしつつ、さらなる領野へ向かってゆくことを期待する。

文学は真に自己の根源から生れるものである。森川義信は、「山川章」「銚しのぶ」、果ては「鈴しのぶ」という女性名を用いて詩を書いたが、最後は「森川義信」に帰っていった。筆名文化を否定するものでは何らないが、この自己を受け入れなければ、自己を超える自己は見えてこないと思う。

タイトルも、もう一工夫を要する。歴

史的名作にも、『無題』『詩集』などと題されたものが少なくない。だがそれは、

「文学」が強い求心力を持っていた時代のことだ。かつて本学の教員だった十返肇は、「文壇の崩壊」という書物をものしている。「文壇」という中心が崩壊したいま、読者を引きつけるタイトル作りも、(面倒なことだが) 必要であろう。

以上を踏まえて、最終候補に私が推したのは、槇栖鈴信と清水人緒である。

槇栖鈴信「胎児」は、子宮の中の子が母に語りかける、グロテスクな短篇と思考をとおいて、母と子の関係が逆転し、読者を迷宮に陥れる、見事な作である。「残虐への郷愁」(江戸川乱歩)が、物語と詩的表現の双方をとおして描けている。耽美主義の教養も感じさせ、今後が期待できる。

清水人緒「清水人緒の俳句三十句」は、静謐な言葉のうちに、「自己」の息吹を感じさせる佳篇である。「夏の果あるのがそれはこの心」「私たち閉じ込められる水母かな」等は、俳句という形式には

収まりきらない、「私」への希求がある。

次点として、長村夢「シヨコラ」、影森いづ「そうして、幸福論。」を挙げる。

前者は殺人の描写力が、後者は物語じかけが秀でていた。ただし、そのいずれも、一個の「短篇小説」にまでは至っていなかった。石川淳が言うように、短篇小説と「短い小説」は違う。削るべきところは削り、複雑な感情をちよつとした描写にまで落とし込み、何もかもを決して描こうとしないような心がければ、両作はさなる完成度を獲得しただろう。

オンライン選考会(九月三十日実施)の結果、「胎児」が受賞作として選出された。また上田・浅沼両先生の推薦により、澁谷冴介「休みの日」が佳作として選ばれた。

文学賞というものは、落選すると人格まで否定されたかのように落ち込むのが常である。そこで諦めるか、ずぶとく貫くのか、勝負の分かれ目。諦めるにしても、エネルギーを別ルートで放射することだ。情熱そのものを否認すべきではない。

最後にあえて厳しいことを言うと、世界をやんわりと肯定する高校生の感性が、少し物足りなかった。

吉本隆明は、「なぜたれのために一篇の詩をかくか」と問いかけ、「われわれは拒絶されるためにかく」と自答している。吉本とともに「荒地派」を形作った黒田三郎は、「幸福な人は詩を書くな」と言う。

もしも幸せなら、その幸せを守りつづけるのがいい。だが、幸福という名の光に傷つけられているなら、そこから血が流れているのなら、その血によってこそ言葉を書くべきだ。文学はこの世界を肯定するものではなく、否認し、拒絶し、そしてゼロから新しい「世界」を啓示するものだ。

世界を肯定する「光」より、否定する「闇」をこそ希望する。真の肯定のためには、否定の力が必要だからだ。ハイデッガーは、「言葉とは武器である」と言う。言葉という凶器で、みずからの実存を、世界の深層を切り開く表現を、若い世代に期待する。